

---

# はざま

宗也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

はざま

### 【Nコード】

N1139Y

### 【作者名】

宗也

### 【あらすじ】

高校2年生の明日香は、進学校に通う普通の女子高生。オシヤレや恋愛、そして異性に興味はあるものの、貞節を守ることが正しいと信じてきた。しかし、ある時、クラスの男子から妙な提案をされ、受け入れたときから明日香の意識が変わる。

## 自慰

部屋の中に音が響く。  
いつもより大きく聞こえる気がする。  
でも、止められない。

私の左手の指は、ブラウスの中で胸をまさぐってくる。  
ブラはフロントホックを外したから、あまり邪魔にならない。

ううん、左手だけじゃない。

右手は、制服の黒いプリーツスカートをたくし上げ、  
薄い水色のショーツの中で、  
誰にも触られたことのない秘所を擦っている。

音はそこから響いてくる。  
少しだけ粘着質な液体が、ねっとり  
人差し指と中指に絡んでくるのが分かる。

気持ちいい。

もうすぐお母さんがパート先から帰ってくる時間だ。

いつもだったら、お父さんやお母さんが  
寝静まった時間にするのに、今日はもう駄目。  
体が我慢できない。  
早くいきたいの。

あん。

不意に左手の指が私の胸の突起をはじいた。  
同時に、右手の人差し指が秘所の突起をなぞる。  
繰り返す、繰り返すなぞる。

少しずつ力を強くこめて、何度もこするの。

ああ、もうすぐいきそう。

私のおそこはだれも触ったことがないけれど、  
今日、斉藤君の唇がその近くまでキスをした。

私の足を広げ、膝に口づけたかと思うと、徐々に私の中心を  
狙って、上がってきた。

内腿にやさしくキスを繰り返す、ショーツの縁の近くまで  
柔らかい唇を押し付けた。

ああ、だめ。

本当に限界。

指がさつきより激しく私を責めたてる。

斉藤君よりも荒々しい。

うっん。斉藤君は手は出さなかった。

ただ足にキスをしただけ。

指で触れようとは一切しなかった。

でも、今の私の手は斉藤君の手だ。

斉藤君が私の体を責めているの。

女の子の一番気持ちいいところを、

私の一番気持ちいい強さと速さでこすっているの。

ああ、予感がくる。

すると、斉藤君の手が私をさらに激しく責めたてる。さっきまで優しく乳首をこねていたのに、胸全体を鷲掴みにして、こねる。

右手は、もう分からない。

ただ、大事な突起から、激しい快感が頭を突き抜ける。何度も何度も。

あ、

ああ。

い、いく。

腰が浮いた。

「あ、ああ、あ〜〜」

浮いた腰がさらにつきあがるのが分かった。それも何度も天井に向かってつきあがった。

私の声がどれほどの大きさだったのか分からないけれど、どこか遠くの方から聞こえるような気がした。

## 依頼

斉藤君に呼び出されたのは3日前のことだ。

「吉川、ちよつといい？」

そうやって、放課後斉藤君の所属する漫画研究会の部室に呼び出された。

斉藤君は外見は学年でもトップクラスと評判の男の子だ。

なんかオタクっぽい部活に入っているくせに、やたら運動神経がいい。

去年の体育祭ではリレーの選手に選ばれていたし、

クラス対抗のバレーボールでは、バレー部の人より活躍していた。

性格はみんなに優しいし、成績だって学年トップレベル。

きっと卒業後は県外の旧帝大に進むんだろうって、みんな言っている。

5

そんな斉藤君だから、普通の女の子だったら近づきたくない漫研の部室に

入る時も、ちよつとどきどきした。

だって、こんなシチュエーションなら告白されるかも、って期待するでしょ。

「あつ、吉川」

私が部室に恐る恐る入っていくと、斉藤君は屈託のない笑顔で迎えてくれた。

この笑顔が可愛いって、優子が言っていたっけ。

部室を見回すと、誰もいない。  
そういえば、漫研は斉藤君とあと一人幽霊部員がいるだけって聞いたことがある気がする。

「用事って何？」

差し出された椅子に座って、斉藤君と向かい合うと私は率直に聞いた。

「うん、まあ、かなり頼みづらいことなんだけど……」

そう言って、斉藤君は顔を赤らめる。どうやら告白ではないみたい。

夕暮れの日差しはもう落ちかけていた。  
部室の中が少し暗くなった気がする。

幾分の躊躇の後、ようやく斉藤君は思いがけない言葉を発した。

「俺、吉川にモデルをお願いしたいんだ」

「ええっ、モ、モデル!??」

私の言葉が部室中に響いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1139y/>

---

はざま

2011年11月2日03時13分発行